



福祉見てある記④

「ミズーラの街並みと福祉」

熊本学園大学はモンタナ大学と姉妹提携を
しており、学生や教員の交換派遣制度を持っ
ている。その制度に基づき、昨年8月から
アメリカ合衆国はモンタナ州のミズーラとい
う街に来ているが、そこで目にしたり耳にし
たりすることを紹介しながら、広い意味での
社会福祉の問題を考えたいと思う。

アメリカは車社会で、車がないと不自由す
る。そこで、こちらに着いてさっそく車を手
に入れた。日本と違い、左ハンドルで右車線
を走るわけだが、それ以外にもいろいろ発見
することがある。まず気がつくのが、道の広
さである。1車線分の幅も日本よりだいぶ広
めだが、それだけでなく、中央には左折用の
車線を設けてあったりするので、片側2車線
だと、計5車線分の道幅ということになる。
左折に関連するが、こちらでは、交差点での
左折用の矢印は信号が青に変わる前が出る。
つまり、赤のまま最初に左折用の車を通して、
それから直進や右折の車が交差点に進入でき
るというわけである。(走行する車線が右か
左かの違いから、反対車線をまたぐのは、ア
メリカでは左折時、日本では右折時となる。) 欧
米で一般的に見られるこのシステムは合理的
で、日本のように、右折用の車が溢れて車
線を潰し、渋滞を引き起こすといった心配が
あまりない。その時の歩行者用信号ももちろ
ん赤で、歩行者が事故に巻き込まれる可能性
も少ないだろう。日本でもこうした右折用信
号はあることはあるが、その数は圧倒的に少
ないように思う。反対車線を走る車の間をぬ
って左折しようとするリスクも大幅に軽減する

だろう。日本のように青で一斉にスタートし、
いつでも右折可能となると、多少無理してで
も右折しようというリスクを負わされる。そ
のリスクは歩行者も負うことになる。なぜな
ら、歩行者用信号もその時は青だからである。
無理をして右折してきた車が歩行者をどれだ
け意識できるだろうか。日本では近年、道路
交通法が改正され、自転車も歩道を通ってい
いことになったが、その関係で横断歩道が交
差点寄りに描き直されたのをご存じだろうか？
そのため、それまであった車道と横断歩道と
の間は削られ、右折した後に歩行者に気付い
ても、反対車線からの直進車を避けるための
スペースはなく、歩行者の前でブレーキを踏
み、対向車がぶつかってしまうか、あるいは
対向車を避けようと無理に横断歩道に侵入し、
歩行者を巻き込んでしまうといった危険性が
大きくなってしまった。

道幅に話を戻すと、住宅街では片側1車線
の計2車線だが、その幅はゆうに4車線分あ
る。なぜなら、こちらでは路上駐車が基本だ
からである。そのため、歩道沿いの左右2車
線は駐車スペースとして空けられている。駐
車はその家の住人と限らず、誰でもできる。
駐車対象者や駐車時間を制限している箇所も
あるが、週末の土日や、週日の夕方5時以降
はその制限がなくなる。ダウンタウンでは、
これに代わり、パーキング・メーターがこの
歩道沿いの左右2車線を埋め尽くしており、
同様に週末と週日5時以降は例外で、料金は
必要ない。

車道の幅に加え、歩道の幅も大きく、どこ
に行っても、車イスで通れないことはない。
住宅街では街路樹が並び、歩道は住宅と街路
樹の間にあるが、その歩道から住宅の間には

広々とした前庭があり、敷地を囲むフェンスなどもほとんど見かけない。車が歩道に飛び込んできたとしても、逃げる余地は大いにある。それに比べて日本はどうだろうか？塀や壁で逃げ場のない歩道の空間は、怖ささえ感じる。歩道の幅も確保されず、線だけを引いたお粗末なものも日本ではよく見かけるが、時には、電信柱などで歩道が遮られ、どう見ても車道に出ずには通れない、車イスなんて問題外といったものさえ目にするだろう。

こうした、歩行者を考えた仕組みは他にもある。例えば、横断歩道である。信号が付いている交差点では、歩行者は信号に準じて横断するが、信号がない横断歩道では、あくまでも歩行者優先で、車は歩行者に道を譲らなければならない。これはドライバーのモラルの問題としてではなく、法律で支えられており、停止しなかった場合の罰金は100ドルを下らないと聞いた。また、車イス優先の駐車スペースで違反した場合は、罰金100ドルとボードに明記されている。日本では悪びれることなく堂々とこうした駐車スペースに車をとめる健常者も多く見かけよう。もちろん、そのような違反者をこちらでも見かけないわけではないが、そこが公道であろうとなかろうと、警官が駆け付け次第、違反切符が切ら



(車イス用の駐車スペースにあるサインボード)

れることになろう。法律によるこうした下支えがなぜ日本ではできないのか、逆に不思議に思えてくる。

こちらでは飲食店内での喫煙は基本的に禁じられており、ホテルでも禁煙を基本とする所が多く、喫煙者は日本以上に肩身が狭いだろう。大学の建物にも、子どもたちが通う小学校にも、喫煙禁止のはり紙を目にする。



(小学校にある喫煙禁止のはり紙)

こうしたものを見るにつけ思うのは、社会的弱者に対する人権意識の高さである。歩行者やしょうがい者への配慮をドライバーに課し、受動喫煙の害を与えないよう、喫煙者を一定の空間から排除する。価値観が多様なアメリカ社会と言いながら、人権として守るべきものに対しては共通した認識を求める。逆に、こうしたゆるぎない土台があるからこそ、多様な価値観の議論がこの社会ではできるのではないだろうか。人権に関する意識は、具体的な法律、具体的なスペース、具体的な街づくりに活かされている。アメリカは北欧と比べ、いわゆる福祉国家ではないかもしれない。しかし、福祉施設といった特別なものばかりに目を向けるのではなく、人々が常識として作ること、これにも福祉を見つけることができる。

(本研究所研究員 土井文博 コミュニケーション論)